印度言語の系統

福島直四郎

岩波講座　東洋思潮（東洋言語の系統）

印度言語の系統

福島直四郎

岩波書店

吟詠流行し、十五世紀からは宗教詩も發達し、チャンディー・ダース（Chaṇḍī Dās）はラーダーとクリシュナ天との神聖なる愛情を讃美し、ムクンダ・ラーム（Mukunda Rām）は女神チャンディー（Chaṇḍī=Durgā シヴァ天妃）を頌讃してチャンディー・マンガル（Chaṇḍī-Mangal）を著した（一五八九）。其他熱烈なる宗教家チャイタニヤ（Chaitanya 1486–1534）、ラーム・プラサード（Rām Prasād 1718–1775）、ラモーハン・ロイ（Ramohan Roy 1774–1833）等の名もベンガル文學と密接に關係するが、十九世紀よりは前述の如く夥多のサンスクリット要素を含む文章語の發達を來し、一方にはその弊を矯めんとする有識者の運動も起つた。就中現代ベンガル文學に光彩を添へるものとしてラビンドラナート・タゴール（Rabindranath Tagore）の詩名は世界文壇に轟いてゐる。ナーガリー文字系に屬するベンガル文字は十一世紀に成立し、今日一般に使用せられてゐるが、前記の文章語中に借用されるサンスクリット單語は古來の綴字を踏襲しつゝ、而もその發音は之に副はず、學習者をして常に困惑せしめてゐる。

4. アッサム語（Assamese）

大體に於てアッサム谿谷をその領域とし、使用者總數約百四十五萬、西方のベンガル語を除いてはインド・アリヤン語と隣接してゐないが、異系統の言語より受けた影響は多くない。言語的にはベンガル語に最も近く、方言の別はさまで著しからず、標準形は東部方言群に屬し、文章語と云へどもベンガル文章語の如くサンスクリット化されてゐない。詩に劇に固有の文學は數百年の傳統を有し、學術書としては醫法に關するもの多く、また特に歷史文獻の發達を誇つてゐる。文字は上述のベンガル文字と大差ない。

五、中部支派

1. 東部ヒンディー語 (Eastern Hindī)。

西方は西部ヒンディー語に、東方はビハーリー語・オリヤー語に接して北より南に延び、北は東部パハーリー語(=ネパール語)に、南はマラーティー語に限られ、使用者總數約二千四百五十萬を算する。その位置の示す如く言語的にも東西に隣接するインド・アリヤン諸語と部分的共通點を示してゐる。方言を大別して三種とし、往古ラーマ王子 (Rāma) の首都であつたアヨーディヤー (Ayodhyā) の名を負ふ現今のアウド (Oudh) 地方に行はれるアワディー語 (Awadhī) 最も重要で、その南方にバゲーリー語 (Baghēlī) 及びチャッティースガルヒー語 (Chattīsgarhī) の二方言がある。北部印度の聖書とも云ふべきトゥラシー・ダース (Tulasī Dās 1532-1623) のラーム・チャリット・マーナス (Rām-carit-mānas「羅摩所行の湖」) はアワーディー語で書かれ、北印九千萬人の愛唱する所となり、その宗教思想、日常道徳の規矩となつた。尚之より少しく古く十六世紀の中葉には回教徒マリック・ムハマッド (Malik Muhammad) がロマンティックにして哲學的含蓄を兼ねるパドゥマーワティ (Padumāwatī) を著して名を殘してゐる。東部ヒンディー語は一般にナーガリー文字を使用する。

2. 西部ヒンディー語 (Western Hindī)

東部ヒンディー語の西、ラージャスターニー語の東、ガンヂス河とヂャムナー河とにはさまれた所謂ドーアーブ

(Dōāb) 地方即ち往昔婆羅門文化の中樞と目された中國地方 (Madhyadeśa) に擴り、西北はパンヂャーブ地方の一部に及び使用者總數約三千八百萬に及ぶ。方言としてはヒンドスターニー語の外四種の別ありとせられるが、その中最も重要なのはマットラ (Muttra 古名 Mathurā) を中心とするブラヂュ・バーシャー語 (Braj Bhāshā or Bhākhā) で七百八十萬人の使用者を有する。マトゥラーは嘗つてインド・アリヤン文化の一中心をなし、且つクリシュナ天成長の地と傳へられ、早くよりクリシュナ天文學、殊にマトゥラーの牧女に圍まれて嬉戲するその幼時を主題とする宗教詩が發達した。就中アクバル大帝の治下、十六世紀の中葉に出でた盲目詩人スール・ダース (Sūr Dās) の名最も聞えてゐる。彼の後繼者中最も有名なのはサットサイー (Sat-sai「七百頌」) を著したビハーリー・ラール (Bihārī Lāl 十七世紀の前半) である。

次にヒンドースターニー語 (Hindōstānī) は西部ヒンディー語の一方言の意味に於てはガンヂス河ドーアーブの上部地方・ローヒルカンド地方及びパンヂャーブ内の東部アンバラ地方に行はれるものを指し、その隣接地に於てはパンヂャーブ語に融合してゐる。しかし普通にはヒンドースターニーの名の下に全印度特にヒンドスタン地方の共通語 (lingua franca) が意味されてゐる。但しこの名は近世歐洲人の使用し始めたものである。一般に行はれてゐる假説によれば、ガンヂス河ドーアーブの上部地方及び西部ローヒルカンド地方の方言を基礎とし、デーリ宮廷附屬のバザーに醸成せられ、モゴル帝國の官吏・軍人によつて全印度に波及せしめられたと云ふ。然しかゝる説明はこの一大共通語の成立を言語的・地理的・歴史的に遺憾なく了解せしむるには困難であり、比較的近代に屬する現象なるに拘らず未だこの興味ある言語問題は完全な解決に達してゐない。共通ヒンドースターニーにも數種の別が生じてゐる。デ

カン地方の回教徒の用ひるものはダキニー（Dakhinī）と稱し、次に說くウルドゥーほどペルシャ語系の借用語を含まず、文法的にもその特徵をもつてゐる。ペルシャ語（及びアラビヤ語）の單語を無制限に借用し、ペルシャ文字にて書かれ、主として西部ヒンドスタン地方に於て回教徒並にその影響下にあるヒンドゥー教徒によつて使用せられるものはウルドゥー（Urdū「元來軍用バザーの言語」）と稱せられる。ウルドゥー文學は初めデカン地方に起り、「レークタの父」と呼ばれるワリー（Walī of Aurangābād ca. 1680–1720）を首班とする詩人の一群に培はれ、次いでその中心をデーリに移した。また十八世紀の中葉よりはラクナウを中心として有力なる詩人の一派が興起した。レークタ（Rēkhta）とは詩文に用ひるウルドゥー語の一形で、ウルドゥー詩文の特徵は範を全くペルシャ文學に仰ぎ、韻律法までも之に倣ふにある。散文文獻も英國の治下十九世紀の始よりカルカッタを中心としてその發達を見るに至つた。

上述の如くウルドゥー語が徹頭徹尾ペルシャ語の桎梏に甘んずるに反し、その語彙よりペルシャ語系單語を驅逐してインド・アリヤン語系のものを代用せんとする企圖はラッルー・ラール（Lallū Lāl）のプレーム・サーガル（Prēm Sāgar「戀愛の海」一八〇九年）によつて成功した。こゝに始めてヒンドゥー教徒の要求が滿され、全ヒンドスタンに亙つて散文形の標準となつた。ウルドゥー語に對し普通之を單にヒンディー語（Hindī or High Hindī）と呼び、豐富なる文獻が存在してゐる。但しこのヒンディー語も次第にサンスクリット語よりの借用語を增加し一部の識者の憂ふる所となつてゐる。

3. パンヂャーブ語（Panjābī）

大體に於て中部及び東部パンヂャーブに擴つてゐるが、後者の一部は西部ヒンディー語の領域となつてゐる。西方はラフンダー語と接觸し、その境界は前述の如く不明瞭である。使用者總數約千三百萬に近く、中部支派に屬する諸語中サンスクリット語及びペルシャ語の影響を蒙ること最も少い。方言は大別して標準形とドーグリー方言（Dōgrī）とに分ち、前者は中部パンヂャーブ平原地方に擴り、アムリッツァルを中心として用ひられるものを純粋形とする。文字は固有のランダー文字（ラフンダー語及びシンディー語參照）が行はれてゐたが、十六世紀の中葉より之を改良してグルムキー文字（Gurumukhi）を作り、シック教聖典を書くに使用した。然し回教徒は一般にペルシャ文字を用ひてゐる。ドーグリー方言は北方のヂャンムー地方（Jammū）に屬し標準形と大差ないが名詞の變化に特徴を示し、語彙はラフンダー語及びカシュミール語の影響を受けてゐる。文字はランダー文字に類し、タッカリー（Ṭakkarī）と稱せられる。パンヂャーブ文學は通俗敍事詩を主とし、材を古來の英雄譚に取つてゐる。シック教の聖典（Ādi-grantha）は同教の教父アルヂュナ（Guru Arjuna）の時（1581-1604）に結集されたもので、かの有名なるカビール（Kabīr）の作詩をも含み、前記のグルムキー文字をもつて書かれてゐるが、その言語は大部分古代ヒンディー語で、讃美歌の一部のみパンヂャーブ語を用ひパンヂャーブ文學最古の文獻に屬してゐる。

4. グヂャラーティー語（Gujarātī）

大體に於てグヂャラット及びバロダ地方をその領域とし、使用者總數約一千萬に及ぶ。言語的には北方に隣接するラージャスターニー語に最も近く、十五世紀に於ても尚マルワール（ラージャスターニー語の領域）とグヂャラットとの

言語は判然たる區別を示さなかつた。西方はビーリー語及びカーンデーシー語に接し、南方はマラーティー語に境し、また西北方シンディー語に屬するカッチー方言(Kacchi)と隣る地方にはラーヂャスターナ及びグヂャラットよりの移民多くして互に單語の借用を行つてゐる。眞の方言的區別は發達せず唯教養の有無により用語も異り、その差は主として發音に關係する。グヂャラットの地は古來幾多の民族の集合・離散・混合した所で、その名は西暦六世紀匈奴(Hūṇa)と共に印度へ侵入したグルヂャラ人(Gurujara or Gūjar)に負つてゐる。この地の言語は中古インド・アリヤン語の一種アパブランシャ語(第四節參照)の發達に寄與する所があり、文獻は十四世紀に溯る。ヂャイナ教徒及び八世紀にイラン地方から移住して來たパールシー教徒の手により夙に文學的活動が開始され、ヒンドゥー教系の文學はナラシンハ・メヘト(Narasinha Meheto 1415–1481)のクリシュナ天讃歌に始つてゐる。現代に於ても散文に詩文にグヂャラーティー文學の量は決して少しとしない。文字は嘗つてナーガリー文字を使用したが、今は印刷用として一般にカイティー文字が行はれる。

5. ビーリー語(Bhili)及びカーンデーシー語(Khāndēsī)

グヂャラーティー語とラーヂャスターニー語との領域の中間に介在して言語的にも密接に關係し、南方は之等兩語と共にマラーティー語に接してゐる。ビール人の使用するビーリー語はアヂュメルよりサトプラ山脈の間に擴り、グヂャラーティー語の東部方言と稱しても不當でない。カーンデーシー語はその南方のカンデーシュ地方を占めてマラーティー語の影響を示してゐる。使用者總數は夫々二百七十萬及び百二十萬と稱せられる。兩語とも顯著なる方言的

區別を發達せしめず、文化程度低き部族の言語として文學を有しない。唯ビーリー語の使用者が遠くオリッサ地方、ミドナプル地方、又北方パンヂャーブ地方まで散在してゐるのは注目に値する。

6. ラーヂャスターニー語（Rājasthānī）

所謂ラーヂャスターナ地方卽ちラーヂュプターナ州及び中央印度州の西部に擴り、東は西部ヒンディー語に接し、西南はビーリー語・グヂャラーティー語と連る。使用者總數約千六百三十萬に達し、多數の方言は概略四種の方言群に分たれる。その中最も重要なのは西部ラーヂュプターナを中心として行はれるマールワーリー語（Mārwāṛī 使用者約六百萬人）で、既に一言せる如く之とラーヂャスターニー語とは頗る密接な關係にあり、十五世紀に屬する文學作品に關しては古代マールワーリー語と稱しても古代グヂャラーティー語と稱しても差支へないほどである。尙マールワーリー語は固有の領域以外印度の到る處に使用者を有してゐる。グヂャラットにその名を與へたグルヂャラ人は現今のラーヂュプターナ地方に勢力を獲得し、その上層階級はクシャトリヤ族（刹帝利族）と認められてラーヂュプート（Rājpūt < Rājaputra 王子の義）と稱せられたが、下層階級は依然として遊牧に從事してグーヂャル（Gūjar < Gurjara）なる階級（caste）を形成した。パンヂャーブに行はれるラーヂャスターニー語の一方言グヂャリー語（Gujarī）の名も亦この民族の移動の跡を語るものである。文學語としてはマールワーリー語最も顯れてゐるが、その他の方言で書かれた文獻も豐富に存在し、特にラーヂュプット王侯の武勇譚を謳つた歷史的歌謠多く、ヂャイナ敎徒の手になつた物語文學も少くない。マルワール詩人は往々西部ヒンディー語の古體を使用したが、之をピンガル語（Pingal）

とを稱し、ディンガル語（Dingal）卽ち本來のマールワーリー語古體と區別する。文學用には普通のナーガリー文字を使用するも、日常用としてはマハーデャーニー文字（Mahājanī）卽ち前述のランダー文字に類する難讀の書體が用ひられる。

六、北部支派。パハーリー語（Pahārī）。

パハーリー語とは「山岳地方の言語」の意味で、ヒマラヤ山系に沿ひ東はネパールより西は所謂サパーダラクシャ（Sapādalaksha）の丘陵地方に行はれるインド・アリヤン語の總稱として用ひられ、之を大別して東部・中部・西部パハーリー語とする。元來この地方はチベット・ビルマ語族の領域で、更にそれ以前にはムンダー語が行はれてゐたと思はれる。從つてこの地方のインド・アリヤン語は歷史的事件に附隨して移植せられたもので、パハーリー語がラーヂャスターニー語と密接に關係する所以もこゝにある。

東部パハーリー語はネパール國に用ひられる故にネーパーリー語（Nēpālī）或はナイパーリー語（Naipālī）とも稱せられる。但しネパール國の主要言語は寧ろチベット・ビルマ語で、其内最も重要なるネーワーリー語（Nēwārī）は上記のネーパーリー語と同じく國名に由來する稱呼である。十六世紀に西方から移つて來たラーヂュプート族及びカス族はゴールカーを占領し、次いで全ネパールを支配する現在のゴールカーリー王朝の基礎成るに及び（一七六八）、ラーヂャスターニー語とカス族の言語との混合形を官廷語に採用した。故に東部パハーリー語はカス・クラー（Khas-

kurā「カス族の言語」) 或はゴールカーリー語 (Gōrkhālī) とも稱せられる。大いにチベット・ビルマ語の影響を受け、多數の方言に分れてゐるが未だ精密な調査は遂げられず、印度言語調査の擧げた數字は英領内に住居するネパール人に關するものである。一般にナーガリー文字を使用し、文學には特筆すべきものがない。然しネパールは古來佛教文學の發達に重要なる位置を占め、現今も貴重なる佛教文獻を多量に保存してゐることは注目に値する。

次に中部パハーリー語は東部サパーダラクシャ地方卽ちクマウン及びガルフワルに用ひられ(使用者約百十萬人)、西部パハーリー語は西部サパーダラクシャ地方卽ちシムラを中心とする丘陵地方に行はれる(使用者約八十五萬人)。之等は前述のカス族及びグルヂャラ族の占據した地方で、歷史的にはラーヂュプターナ地方と密接に關係し、從つて言語的にもラーヂャスターニー語と緊密な間にある。幾多の方言に分れてゐるが文學の發達なく、西部パハーリー語はパンヂャーブのドーグリー方言と同じくタッカリー文字を使用してゐる。

七、シンハリーズ語 (Singhalese)

セイロン島の南部に用ひられ、使用者約三百萬人卽ち全島人口の三分の二に及んでゐる。印度半島以外にインド・アリヤン語が移植された最古のもので、傳說によれば西曆前第一千年紀の中葉に溯るとされてゐる。又西曆前三世紀には阿育王 (Aśoka) の子マヒンダ (Mahinda 摩哂陀) が師子洲卽ちセイロン島へ佛教を傳へたと云ひ、且つ小乘佛教のパーリ語聖典もこゝに現存の體裁を整へ、セイロン島は今日も尙小乘佛教の一大中心をなしてゐる。然し同島は元來ドラヴィダ語の領域で現在に於いてもその北半にはタミル語が用ひられてゐる。從つてシンハリーズ語は一方にド

ラヴィダ語の影響を受け、他方には範をパーリ語に仰ぎ、その結果他の現代インド・アリヤン語とは音韻組織・動詞變化等を著しく異にする。古典語をエール（Eḷu）と稱し、エル文學は殆んど全く佛教的で、嘗つては古代シンハリーズ語の註釋書（Aṭṭhakathā）が存在したと傳へるが現存のものは十二世紀に溯り得るのみである。詩文學の最盛期は十五世紀に屬し、シュリー・ラーフラ・テラ（Śrī Rāhula Thera 生地に因んで普通 Toṭagamuva と稱す）の名最も顯れてゐる。但し題材様式共にサンスクリット文學の模倣に終始してゐる。その他の學術書として特筆すべきはヴェデハ・テラ（Vedeha Thera）の著シダット・サンガラー（Sidat-saṅgarā 十三世紀）と呼ぶ文法書でシンハリーズ語に對する最高權威と仰がれてゐる。文字は所謂「パーリ文字」系に屬するセイロン文字を用ひ、最近に至り近代シンハリーズ語で書かれた通俗文學の興起を見てゐる。

以上印度及びセイロン島に用ひられる現代インド・アリヤン諸語に關して略述したが、之等多數の言語或は方言の間に認むべき親緣關係の程度にも種々なる差別あるは勿論である。この問題に關して詳論するには各語の文法及び語彙に對する專門的知識を必要とする故、上にはあらゆる假說を避け、たゞ著しき親密關係を有するものについてのみ注意した。卽ちダルディック支派並に西北部支派は各〻特徴ある一群をなしつゝも、後者に屬するラフンダー語は前者と類似點を示し、他方にはパンヂャーブ語に對して明確な境界を有しない。グヂャラーティー語はマラーティー語と一脈相通じつゝその古層に於いては古代ラーヂャスターニー語と殆んど區別なく、ビーリー語・カーンデーシー語と共に一群をなし、且つパハーリー諸語もその一支分に過ぎぬことは歴史的事實によつて裏書される。中央部に於いて

西部ヒンディー語は強く周圍に影響を與へてゐるが、現代印度の大共通語ヒンドースターニー語にはパンヂャーブ語の要素を認むべく、東部ヒンディー語の勢力は略〻ベナレスの經度に至つて止み、それより東方ビハーリー語・オリヤー語・ベンガル語・アッサム語よりなる東部支派は發音に文法に特徴ある一群をなしてゐる。夙に派出したセイロン島のシンハリーズ語を別にすれば、インド・アリヤン語の領域は印度半島の北部・中部に亙つて間斷なく連續し、ヨーロッパに於けるロマンス諸語の如き分散狀態を示さない。唯半島以外に派出してアジヤ及びヨーロッパに齎され、特殊な變遷を遂げたものにヂプシー語（Gipsy language, Zigeunersprache, le tsigane）がある。ペルシャ・アルメニヤを經て西部ヨーロッパまで遍歴した放浪の民の言語として注目せられるが、その起源は印度の西北部に屬した方言なるべく、西暦五世紀頃分派したものと考へられる。その通路に於いて接觸した諸國語の要素殊に單語を吸收して獨特の語彙を作り、又音韻變化に關してもヨーロッパのヂプシー語とアジヤのヂプシー語とは同じでない。アルメニヤに於けるヂプシー語の文法は全くアルメニヤ語のそれに從つてゐる。

グリヤソン博士の印度言語調査は世界に誇るべき成績を擧げたが、更に一歩をすゝめて現代に於ける言語地理學の研究を十分に參酌し、ヨーロッパ諸國の言語地圖に倣ひ（茲には J Gilliéron, K. Jaberg, J. Jud, F. Wrede の名を擧ぐるに止める）、「印度言語地圖」の作成に向はれんこと切望に堪へぬ次第である。その必要はフランスのヂュール・ブロック教授も力說せる所で、かゝる研究の進捗に從ひ、方言特徴線（isogloss-line）の分布を如實に觀察してこそ各語間の親緣關係が判然となるのである。

近代諸語は當然中古インド・アリヤン語の連續で、言語學的には何等の間隙をも許さない。然し個々の近代語につきその系統を究め、特定の中古インド・アリヤン語と歴史的に連結することは極めて困難である。勿論中古語から組織的に近代諸語を誘導せんとする說明法も行はれてゐるが、仔細に檢すれば多くの場合單なる假說たるに止まり、有力なる專門家の全般的承認と支持とを得てゐない。これ實に印度特有の言語史と吾人の有する研究資料の性質とによるものであるから、以下節を改めて古代及び中古インド・アリヤン語に就いて述べることとする。

第三節　古代インド・アリヤン語

古代インド・アリヤン語を總稱してサンスクリット語（＝梵語）と呼び、その古層をヴェーダ語（Vedic or Vedic Sanskrit）、新層を古典サンスクリット語（Classical Sanskrit）或は單にサンスクリット語と云ふ。印度に於けるインド・アリヤン語の歴史は偉大なる宗教文學ヴェーダの言語卽ちヴェーダ語から出發するが、これは印度土着の言語ではない。アフガニスタンより印度の西北部パンヂャーブ地方へ侵入したインド・アリヤン人の言語なることは語學的・歴史的事情に徵して最早疑を容れぬ。但しその年代に關して不動の斷案を下すに足る憑據を缺いてゐる。あらゆる保留を附しつゝインド・アリヤン語の印度移入年代を西曆前第二千年紀の前半と假定すれば、それ以前の歴史は印度以外に屬することとなる。一方ペルシャに起つたゾロアスター敎の聖典アヴェスタの言語（Avestic）及びアケメニヤ朝の楔形文字碑文の言語（Old Persian）はともにヴェーダ語と著しき共通點を示し、且つ印度に於けるヴェーダとイランに於けるアヴェスタとを比較する時、嘗つて言語・宗敎・文化を共通にし自らアリヤン人（Sanskrit ārya-, Avestic airya-, Old Pers. ariya-）と稱した民族の存在を假定せざるを得ぬ。比較文法は歸納的方法によつてこの共

通語を假定してインド・イラン語と呼んでゐる。然し何時、何處に於いてアリヤン人が共通生活を營んだかは比較文法の決定し得るところでない。唯アリヤン人の一部はイラン地方に定住し、他の一部は印度に入り、共に當初より包藏した方言的特徴を發達せしめ、遂にイラン語派とインド・アリヤン語派との劃然たる區別を示すに至つたことを敎へるのみである。各語派に關し吾人の有する最古の文獻は既にこの分裂が完了した時代に屬し、インド・イラン共通語によつて書かれた文獻は全く今日に傳らない。

古代イラン語は前述のアヴェスタ語及び古代ペルシャ語によつて代表せられ、近代ペルシャ語は後者の系統に屬する。現代イラン方言は複雜に分化してゐるが、その內バローチー語とパシュトー語とが印度の西北隅に接續する事は既に之を述べた。

二十世紀の初め小アジヤに行はれた發掘の結果は言語學界に幾多の驚くべき新發見を提供し、インド・アリヤン語史に對しても積極的に貢獻する所があつた。卽ちヒッタイト國王とミタニ國王との間に交換した條約文（西曆前十四世紀）にはヴェーダの神名ミトラ (Mitra)・ヴァルナ (Varuṇa, 條約文には Aruna)・インドラ (Indra)・ナーサトヤ (Nāsatya) が殆んどそのまゝ列擧せられ、他の馬匹飼養に關するヒッタイト語文書中には一・三・五・七・九を示す數詞が借用され、就中 aika-vartanna「一廻り」に於いてその一を示す數詞の後接辭はインド・アリヤン語系なることを明示してゐる (Sansk. eka- < *aika-, Old Pers. aiva-, Avestic aēva- 'one' 參照)。勿論かゝる發見は種々な解釋・學說を誘發してゐるが、西曆前十四世紀にインド・アリヤン人の大部分が未だ小アジヤに滯留してゐたと考へるより、吾人は寧ろインド・アリヤン人の一部が同胞と別れてこの地方に殘留し、宗敎的・文化的影響を他の民族に與

へたものと考へたい。

次に當面の問題たる印度に於けるインド・アリヤン語の發展を語る前、言語分類上より見たるインド・イラン語派の位置に關して一言する必要がある。この語派が所謂インド・ヨーロッパ語族の重要なる一員をなし、更にこの大語族がヨーロッパに於ける古今の主要國語を殆んど網羅してゐることは既に周知の事實である故、玆にはその構成語派の名稱を列擧するに止めておく。

一、インド・イラン語派 (Indo-Iranian)。

二、アールシ語派 (Arshian)。中亞タリム盆地の北部、往昔の龜玆・焉耆・高昌卽ち現今のクッチャ・カラシャール・トゥルファン地方に用ひられた言語で、早くより死語となつてゐる。普通トカラ語 (Tokharian) と稱するも、バクトリヤに於けるトカラ人との關係は頗る疑問である故、筆者は進んでアールシ語と呼ばんことを提唱する。

三、アルメニヤ語派 (Armenian)。

四、アルバニヤ語派 (Albanian)。

五、ギリシャ語派 (Hellenic or Greek)。

六、イタリヤ語派 (Italic)。古代に於いてはラテン語、現代に於いてはフランス語・イタリー語・スペイン語・ポルトガル語等所謂ロマンス諸語を含んでゐる。

七、ケルト語派 (Celtic)。イタリヤ語派と密接に關係し、現代は振はぬが嘗つて中歐に雄飛した語派である。

八、スラブ語派 (Slavonic)。現代のロシヤ語・ポーランド語・チェック語・セルビヤ語・ブルガリヤ語は之に屬す

る。

九、バルト語派（Baltic）。現代のリスアニヤ語之に屬し、スラブ語派と緊密な關係にある。

一〇、ゲルマン語派（Germanic）。古代に於いてはゴート語、現代に於いてはスカンディナヴィヤ諸語。英語・獨逸語・和蘭語等によつて代表せられる。

一一、ヒッタイト語派（Hittite）。嘗つて小亞に雄飛したハッティ國支配階級の言語で、近時發見された文獻は西暦前十四世紀に屬する。

さて以上の諸語・諸語派の組織的比較研究を使命とするインド・ヨーロッパ語比較文法は之等が全て原始インド・ヨーロッパ語の變遷形に過ぎぬことを教へた。勿論この共通基礎語は假定言語ではあるが、その使用せられた時所をも相當確實に假定し得れば、インド・アリヤン語の歴史を語るに非常な便宜を與へるわけである。かゝる問題は既に比較文法の直接關知せざる所で、寧ろ所謂言語古物學（linguistic palaeontology）の領域に屬する。卽ち比較文法の研究結果によつて推定せられた原始インド・ヨーロッパ語の語彙中宗教・社會・文化・氣候殊に動植物に關する單語について推論し、特殊の文化狀態及び特殊の動植物の存在よりその原始語使用者の原住地・年代等を決定せんとするのである。その結果を綜合するに原始インド・ヨーロッパ人は男子を中心とする大家族制度の下に農業及び牧畜に從事し、春・夏・冬の差をもつ地に家屋生活を營み、漁業・水運の術には熟練せず、輝く天神を崇拜し、穀類野菜の外肉類をも食し牛乳を飲み、蜂蜜より造つたアルコール飲料を用ひ、動物としては牛・馬・羊・山羊・犬・鼠・狼・熊・猪・鹿等を知つてゐた。原住地の問題に關聯して最も屢〻論ぜられる植物については白樺・檜・柳・槲・山毛欅等を

擧げ得るが、植物の名は民族移住に從つて變遷し易きものであるから、原始インド・ヨーロッパ人が果して如何なる植物を知つてゐるかは確實ではない。然しかゝる資料により略〻類似の方法を以つて抽出された結論は區々にして到底確實なる定說とはなり得ない。卽ちアジヤを原住地とする說（古くは A. Pictet, V. Hehn, 最近は S. Feist）とヨーロッパを原住地とする說とあり、後者にあつても南部ロシヤ說（O. Schrader）、バルチック海沿岸說（H. Hirt）、中歐西部說（M. Much）、ハンガリヤ說（P. Giles）等の別がある。又歐亞中間說も古くより提唱せられ（コーカサス說 A. Fick 等）、比較的新しく更にシベリヤ說（J. de Morgan）を主張する學者さへある。筆者はこの點に關し何等の獨創的見解を有する者でないが、近時中央アジヤに於けるアールシ語（＝トカラ語）の發見はアジヤ說を復活せしむべき何等の理由にもならぬことを强調し、南部ロシヤ說の如きは最も無難なる一說なるを指摘するに止める。次に年代に對しては金屬名の比較が重要な推論根據をなしてゐる。比較研究の結果原始インド・ヨーロッパ人はある程度まで金・銀・銅・（靑銅？）を知り、未だ鐵を知らざる狀態にあつたと考へられるが故に、共通基礎語の分裂は考古學の所謂銅器時代の初期卽ち西曆前第三千年紀に屬するものと推定せられ、フランス言語學界の總帥メイエ敎授の如きもこの結論に賛意を表してゐる。

原始インド・ヨーロッパ語に關する吾人の知識は地理的にも年代的にもかく不充分ではあるが、現在知られてゐる他の語族との關係如何は言語學上更に重要な問題で、フィンノ・ウグリヤン語族・セム語族・コーカサス語族との關係は既に學者の注意を惹いてゐる。之等の大語族を連ねてその共通基礎語に溯り得る日を豫想するも强ち荒唐無稽な臆測ではないが、現時の研究狀態に於いては未だ信憑すべき結果に乏しく、何等確實性ある斷言を許さない。

以上インド・アリヤン語の印度以外に於ける親縁關係を尋ねた。之を約言するに、早く原始インド・ヨーロッパ語より分派したインド・イラン語派はやがてインド・アリヤン語とイラン語とに分れ、前者は印度西北部に最後の定住地を得て爾後今日まで少くも三千年の變遷を遂げ、既に略述した近代諸語として二億三千萬人の言語となつたのである。吾人は次にこのインド・アリヤン語の印度に於ける運命を瞥見せねばならぬ。

イラン人と分離したインド・アリヤン人は恐らく數回に亙つてアフガニスタンのカブール方面よりインダス河の上流パンヂャーブ地方に入り、こゝにインド・アリヤン文化の基礎を拓いた。彼等は主として武力に訴へつゝ先住民を征服驅逐し、またある程度まで混血を來したことは疑ない。この先住民が如何なる民族で如何なる言語を語つてゐたかは暫く措き、唯文化に於いても武力に於いても先住民に優越し、言語的にも次第にその領域を擴張したことを記憶すればよい。然しインド・アリヤン人の侵入以前、インダス河流域には既に驚くべき程度の銅器時代文明が存在したことは近時のモヘンヂョ・ダロ及びハラッパーの發掘研究の結果明瞭となつた。この文明とインド・アリヤン文明及び後章に說くべきドラヴィダ文明との關係は幾多の問題を提出するが、發見された遺物に就いて見れば寧ろメソポタミヤ文明と興味ある類似點を示し、この大發掘を指揮したサー・ヂョン・マーシャル (Sir John Marshall) は該文明の時代を凡そ西曆前三二五〇—二七五〇年と推定してゐる。詳しくは本講座中逸見梅榮博士「印度文化の源泉」に就いて見られたい。本書當面の所管はこの文明を展開した民族が如何なる言語を用ひてゐたかにあるが、遺物中豐富に存する文字が未だ滿足に解讀せられず、言語に至つては一切不明なるを遺憾とする。インド・アリヤン人の侵入當時

このインダス河文明は既に衰滅してゐたと見るを至當とするも、遺物中には後世印度教の偶像・神像を偲ばしめるものがあり、兩文明の交渉問題はこゝに益〻複雜となる。インダス河文明とドラヴィダ文明とを同一視する說には贊成せぬが、前者の要素が後者を通じてある程度までインド・アリヤン文明中に滲透したのではあるまいか。

印度に於けるインド・アリヤン語の歷史は有名なるリグ・ヴェーダ本集（Ṛgveda-Saṁhitā）から始まる。ヴェーダ文學一般に關しては本講座中拙著「ヴェーダ及びブラーフマナの思想」に於いて略述したから、今は唯言語方面に就いてのみ考究することとする。

現在のリグ・ヴェーダ本集十卷は西暦前千數百年の言語をそのまゝ保存してゐるものではなくリグ・ヴェーダ詩人と本集編纂者との間には數百年の距離がある。然し印度に於ける口授傳承の方法と、ヴェーダを神聖視して一言一句の變更をも許さなかつた傾向とは驚くべき程忠實に原形を保持してゐる。前述の如くリグ・ヴェーダの言語は古代イラン語に頗る近く、其差は現代に於けるイタリー語とフランス語との差よりも少い。兩者は屈折語（inflexional language）の好例で名詞の格形・動詞の時法形に富み、この點は原始インド・ヨーロッパ語の風貌を最もよく傳へたものである。リグ・ヴェーダ本集の言語は大體に於いて統一的であるとは云へ、之にも古層・新層の別あるは明かで、些少ながら方言的區別の反映と見なし得る點もある。然しこの宗教詩の言語が文章語として固定せられたに反し、其傍に日常口語が自然の變遷を續け、既に中古インド・アリヤン語の階程に近づきつゝあつた事は疑を容れず、口語形の單語が文章語へ混入した事實によつて證明せられる。śithira- 'slack'（中古形 siḍhila- 參照）、jyotis- 'light' の如きは適例で文章語の標準に照して吾人は本來 *śṛthira-, *dyotis- を豫期する。文章語も亦時代に從つて變遷し、

リグ・ヴェーダ第十巻は大體に於いて他の部分より新しい言語狀態を示してゐる。然し文章語の變遷は口語の變化と少しく趣を異にし、主として音韻・語形の規則化 (normalization)・單純化 (simplification) に向ひ、リグ・ヴェーダ以外のヴェーダ本集の言語となつた。

呪法を本來の所管とするアタルヴァ・ヴェーダ本集 (Atharvaveda-Saṁhitā) の言語は年代的に必しもリグ・ヴェーダ本集の言語より新しいとは云ひ得ないが、後者に比し通俗的で單純なのはその目的の然らしむる所と思はれ、サーマ・ヴェーダ本集 (Sāmaveda-Saṁhitā)・ヤヂュル・ヴェーダ本集 (Yajurveda-Saṁhitā) に含まれるリグ・ヴェーダ詩句は屢〻新語形を呈して時代の差を暗示する。更にヤヂュル・ヴェーダ本集中の散文及び之と密接に關係する祭式神學書ブラーフマナ (Brāhmaṇa) の散文に至つて益〻ヴェーダ語新層の特徵を發揮し、これに附屬する祭式祕義書アーラヌヤカ (Āraṇyaka)・哲學書ウパニシャッド (Upaniṣad)・祭式綱要書スートラ (Sūtra) の言語は少數の例外及び擬古用法を除けば殆んど全く古典サンスクリット語に一致する。

ヴェーダ語が約一千年に亙つて變化する間インド・アリヤン人の住居にも移動が起つた。リグ・ヴェーダ讚歌の舞臺はパンヂャーブ地方を主としてゐるが、同族の一部は既に遠く東方に住してゐたらしく、ガンヂス河(古名 Gaṅgā)・ヂャムナー河 (古名 Yamunā) の名も知られてゐる。之に對し他のヴェーダ文獻の示す地理・風物は明かに之等兩河の流域卽ち後にサンスクリット文化の中樞となつた「中央地方」(Madhyadeśa) に屬してゐる。先住民を威服して戰塵漸く收り、社會的には婆羅門至上・四姓(カースト)の峻別、宗教的にはヴェーダ神聖・祭式萬能を標語とした。かゝる領域の變化が言語上にも反映するは當然で殊に r 音・l 音の歴史は注目に價する。原始インド・ヨーロッパ語の r と l と

はリグ・ヴェーダ語に於いて共にrで代表せらるゝを常態とし、lの存在は當時の口語方言の影響と見なし得るに反し、他のヴェーダ語に於いてはlの使用次第に增加して古典サンスクリット語の狀態に近づいてゐる。今リグ・ヴェーダ語の rih- 'to lick' と他のヴェーダの lih- とを比較するにギリシャ語 λείχω, ラテン語 lingo 等は語源的にl音を支持し、ヴェーダ語の新層が却つて原始形に近い事を證明する。かゝる事實は文章語の傍にあつて本來のrとlとを區別した口語方言の存在を間接に指示するものと云はねばならぬ。この外にも音韻・語形・語彙に關しリグ・ヴェーダ語と他のヴェーダ語との間には明瞭なる推移を認め得べく、詩文と散文との差を考慮するも尙ある程度までは口語方言の影響を想はしめるものがある。

印度には早くよりヴェーダの解釋・語源・文法に關する專門學者を輩出し、就中ヤースカ (Yāska, ca. 500 B. C.) は解釋學・語源學に名を成し、パーニニ (Pāṇini, ca. 350 B. C.) は有名なる文典を著して古典サンスクリット語の最高權威となつた。パーニニ文典は古代のヴェーダ語と異る普通語 (bhāṣā) の規定を主とし、必しも文章語のみならず正しきサンスクリット語の標準を示すのが目的で當時サンスクリット語が會話にも使用せられた事を許容せずには了解できぬ規則を含んでゐる。パーニニ文典の規定を實際の文獻に照して見れば略ゝスートラの言語に相當するもので、その後カーティヤーヤナ (Kātyāyana) の補修、パタンヂャリ (Patañjali, ca. 150 B. C.) の詳細なる註釋を經て益ゝ完備し、遂に古典サンスクリット語の規矩標準となつた。印度に於いて文法家の努力は他に見ざる成功を收め、爾後サンスクリット語の自由なる變遷は阻止せられ、詩人・文人はその規定を破らざることのみに腐心した。二千年後の今日まで文法の變改なく傳承されてゐる所以である。古代印度の二大敍事詩マハーバーラタ (Mahābhārata) 及

びラーマーヤナ(Rāmāyaṇa)の言語(Epic Sanskrit)は往々パーニニ文典の標準を逸脱し、その通俗的起源を反映せしめてゐるが、カーリダーサ(Kālidāsa 五世紀)・バーラヴィ(Bhāravi 六世紀)・マーガ(Māgha 七世紀)等の詞宗によつて代表せられる古典サンスクリット文學は文典の規則を金科玉條として遵守し、不自然に長き合成語を愛用し、音韻的遊戯に耽り、唯修辭文體に多彩の特色を現はすのみで、言語變遷史の資料とはなし得ない。(本講座中田中於菟彌氏「印度文學思想」參照。)勿論サンスクリット語文獻中嚴格なる文法に違反する例は少くないが、これ決して自發的改革の結果ではなく、唯著者の學殖程度を暴露するに過ぎない。

以上説明したヴェーダ語も古典サンスクリット語も文獻の示す限り文章語として知られてゐる。然し特殊の階級に於いてある程度まで會話に適用された事は、サンスクリット語の地方的差別を指示するヤースカ並にパーニニの記載により、又パーニニ文典の内容・パタンヂャリの記述によつて明かである。例へ之を日常會話に使用せざる一般人士もサンスクリット語で書かれた敍事詩の吟誦、戯曲の演出を愛好したからには充分之を了解し得たに違ひない。當初より今日に至るまで教養ある印度人間の共通語として、種々なる方言の上に立ち、中世ヨーロッパに於けるラテン語の如き位置を占めてきたのである。否之より遙に廣く且つ重要なる機能を持續し、嘗つて死語の狀態に陷ることなく、常に口語方言と接觸して語彙を豐富にし、逆に口語方言に影響して多數の單語を供給してゐる。然し前述の如く極度に固定人工化した結果、自然の潑溂性を缺いてゐることは勿論で、如何に人工化してゐるかを示す好適例に部分的同意語の混同がある。卽ち vastra と ambara- とは共に「衣服」を意味するが後者は「天」の義をも兼ねるが故に前者をも「天」の意味に用ひる類である。

標準的サンスクリット語は古來「中央地方」の教養ある人士（śiṣṭa）に學ぶ必要ありとせられたが、その通用領域は決して印度の北半に限られず、頗る早くからデカン地方に及び、ヴェーダの有力なる支派にもこの地方より起つたものがあり、大文典家パタンヂャリもデカンの人と稱せられる。サンスクリット語は元來婆羅門教と歷史的に密接なる關係をもつてゐるが、他の宗教も次第にこれを採用した。佛教は初め中古インド語を使用したが後次第にサンスクリット語專用に傾き、小乘佛教の一派說一切有部（Sarvāstivādin）はこの語の聖典を有して一部今日に傳はり、大乘佛教も之をその用語として採用した。又中古インド・アリヤン語を主體とし、之にサンスクリット語の語尾を附した混淆語（Mixed Sanskrit）をもつて書かれた作品（例へば Lalitavistara, Mahāvastu）も殘つてゐる。佛教文學は馬鳴（Aśvaghoṣa 一―二世紀）の如き巨匠を出したが、所謂佛教梵語（Buddhist Sanskrit）は往々嚴格なる文法規則に副はぬ點がある。ヂャイナ教は中古インド・アリヤン語の使用を全く放棄するには至らなかつたが、十一世紀頃よりはサンスクリット語を併用し、且つ同教徒中には偉大なる文學的貢獻をなした學匠がある。次にサンスクリット語は早くより中古語と併立して碑文に用ひられてゐたが、六世紀以後は前者の使用が斷然優勢となつてゐる。印度は數次外國人の侵略支配を受け、その國語（ギリシャ語・ペルシャ語等）より單語を借用吸收したが、强靱なるサンスクリット語の生命は政治的覇權によつて毫も減殺されることなく唯自己の語彙を豐富ならしむるに止まつた。印度文化の保存と擴張とを使命とするこの偉大なる文化語の活躍は印度半島以外に於いてもチャンパー（Campā 二世紀より）・カンボヂャ（六世紀より）に及び、佛教に隨伴して中亞の各地に擴り、南海諸島に到つては特にヂャヴァ島にカヴィ語・カヴィ文學（Kawi）の興起を促し、この東方の小島バーリ（Bāli）に於いては今日尙印度教的禮拜儀式にサンスクリット語

の祈禱文・讚歌を使用し、且つ寫本を保存してゐる。(但し内容に對しては何等の理解なく、印度に關する知識すら失はれてゐると云ふ。詳しくは S. Lévi: Sanskrit texts from Bāli. Baroda, 1933 參照。)

第四節　中古インド・アリヤン語

前節に於いて古代インド・アリヤン語の文章形、或は特殊階級語としてのヴェーダ語並にサンスクリット語の變遷を述べ、殊に後者は今日に至るまで印度文化の象徵なることに注意した。然しこれはインド・アリヤン語史の上層を蔽ふ半面を語つたに過ぎず、尙他の重要なる半面に關して述べねばならぬ。

最古の文獻リグ・ヴェーダ本集中に中古語の音形を示す單語の存在する事により、その當時旣に文章語と口語方言との間に溝渠を生じてゐた事を指摘した。上層に於いてヴェーダ語がサンスクリット語へ移る間、口語方言も之と接觸しつゝ變遷を續け、サンスクリット語の成立にも寄與する所なしとせぬ。然しかゝる口語方言も或は碑文に適用せられ、或は潤飾固定せられて文學語となり、その形に於いてのみ現代に傳つてゐる。これを總括して中古インド・アリヤン語或はプラークリット語 (Prākrit) と呼ぶ。名稱 (prākṛtam) の本義に關しては古來種々の見解があり、サンスクリット語 (saṁskṛtam 完成せられたる言語の義) を「基礎」(prakṛti) として生じた言語の義に解し、或は前者と異り「自然」に發達せる言語の義に解し、或は又上層階級の言語に對する「臣民」の言語を指すと云ふ。何れにしても標準的雅語に對して元來日常俗語を意味したことは明かであるが、吾人に知られてゐる限りプラークリット語も亦自然の方言を忠實に代表するものでなく、多少なり固定せられた文學語である。但しサンスクリット語を基礎として發達したものとするのは歷史的に誤謬で、プラークリット語の音形には前者と異る方言的基礎を示すものがあり、その

根柢はヴェーダ語と同時代の方言に歸せられねばならぬ。

　プラークリット語の古層は主として阿育王の碑文及び小乘佛教のパーリ語聖典によつて代表せられる。セム系文字が印度に移入されて改良を受け、實用に供された年代は明確でないが、僅少の遺物を除き阿育王の碑文（ca. 250 B.C.）はその最古形を傳へ、而も年代の明瞭なる點、資料の豐富なる點に於いて印度文獻中この右に出づるものはない。また印度にあつては屢〻文獻の成立年代と現存する最古の寫本との間に甚しき懸隔があり。言語研究上常に不便を感ぜしめてゐるが、阿育王碑文にはこの缺陷なく、之により西曆前三世紀の言語を同時代の資料につき研究することができる。佛教の保護者として宗教・道德方面に多大の關心をもつたこの支配者が廣大なる領土內に殘した多數の碑文の內容を玆に說明する餘裕はないが、言語方面のみに關して見れば正に中古インド・アリヤン語の古層を代表し、而も言語的特徵によつて示される三種或は四種の方言的區別を藏してゐる。西北部の一群はカローシュティー文字(Karoṣṭhī)を用ひ、他は後世印度文字の源流となつたブラーフミー文字 (Brāhmī) をもつて書かれてゐる。後者は更に分れてギルナールの碑文を代表とする西部群、主としてガンデス河流域に分布する東部群、之と共通點を有しデカン地方に存在する南部群となるが、地理的分布と言語的特徵とは必しも一致してゐない。各群の特徵等は專門書に讓り、阿育王宮廷の言語卽ちマガダ語の面影を備へると推量される東部群の特徵のみを擧げて參考とする。卽ち流音(liquid)に關してはlのみでrなく、語尾に於いて古來の *-az (Sanskrit -o) はeとなる。この二點は後段に說くマーガディー語を想起せしむるが、サンスクリット語の區別する三種の噝音 (sibilant) に對しs音のみを示す點はマーガディー語とも異る。兎に角西曆前三世紀の中葉に數種の方言が存在したことは阿育王碑文によつて確實に證明されてゐる。

次に同じくプラークリット語の古形を代表するパーリ語（Pāli）の言語的特徴は阿育王碑文中ギルナール碑文に最も近いが、果して如何なる地方の方言を基礎としてゐるかは異論多くして決定されない。佛教の所傳に從へばマガダ語とされるが、上述した阿育王碑文東部群の特徴と一致しない。且つセイロン島に傳はる現存のパーリ語聖典（Tipiṭaka）の歷史――阿育王時代より佛音三藏（Buddhaghoṣa）の註釋（ca. 400 A. D.）――に關しては幾多の問題があり、巴里の碩學シルヴァン・レヴィ教授はパーリ語聖典中の固有名詞及び術語に特異の古形を發見してゐる（S. Lévi: Observations sur une langue précanonique du Bouddhisme. Journal Asiatique, 1912 II, pp. 495–514）。

以上の外プラークリット語の古層を示すものに貴霜朝（Kuṣāṇa-dynasty）の碑文、佛教碑文、中亞于闐（Khotan）の地より發見せられたカローシュティー文字法句經（Dhammapada）の斷片（普通發見者の名によつて the Manuscript Dutreuil de Rhins と呼ばれる）、馬鳴作佛教劇の斷片等がある。碑文及び法句經の言語は阿育王碑文西北群の系統に屬し、佛教劇中のプラークリットは後に擧げるアルダ・マーガディー語・シャウラセーニー語・マーガディー語の古形を保存してゐる（H. Lüders: Bruchstücke buddhistischer Dramen. Berlin, 1911）。

パーリ語を除き古代プラークリット語は文典家の整理を受けること比較的に少いのに反し、古來印度で代表的プラークリット語として擧げるものは古典サンスクリット語と同樣、規則化の跡著しく、自然の方言の域を遙に脫して文學語として固定されてゐる。

佛陀と略ゝ同時代にマハーヴィーラ（Mahāvīra）によつて隆昌に赴いたヂャイナ教は西曆第一世紀に二派に分裂し、シュヴェータンバラ派（Śvetanbara）の聖典（Siddhānta or Āgama）はアルダ・マーガディー語（Ardha-māgadhī

'Half Māgadhī,' or Ārṣa) で書かれ、その言語は阿育王碑文南部群に類似するが、現存の形では到底マハーヴィーラ時代の言語を代表し得ず、その古形は寧ろ前述の佛教劇に殘つてゐる。この派は聖典以外の外典には別のプラークリット語卽ちヂャイナ・マーハーラーシュトリー語 (Jaina-Māhārāṣṭrī) を用ひてゐる。ディガンバラ派 (Digambara) の聖典の用語は後者に近いが少しく之と異つてヂャイナ・シャウラセーニー語 (Jaina-Śaurasenī) と呼ばれる。

サンスクリット劇は登場人物の身分階級によつてその用語が規定せられ、王侯・婆羅門以外の人物は通則として特定のプラークリット語を使用し、散文の會話には一般にシャウラセーニー語を、抒情調にはマーハーラーシュトリー語を、卑賤の者はマーガディー語を用ひる。戲曲論書・修辭學書・文法書等にはこの外數種の別を擧げて使用細則を規定してゐるが、實際には上記三種を劇用プラークリット語の主要形とする。バラタ作と傳へる古き劇曲論書 (Bharata: Nāṭyaśāstra) はアルダ・マーガディー語の使用をも許して居り、且つ馬鳴の佛教劇は之を實證してゐるが、古典劇には使用されない。之等三種の主要形は皆地理的名稱を有し、第一のものはマツラーを中心とするシューラセーナ (Śūrasena) の名に、第二のものは西南部デカン地方のマハーラーシュトラ (Mahārāṣṭra) の名に、第三のものはマガダ (Magadha) の名に基づき、ある程度まで方言的基礎を暗示してゐるかに見える。然し之等は皆文法家の整理を經、特殊な方言的特徴を誇張し或は限局し、常に標準をサンスクリット語におき、文章語として固定せられたもので、古代の口語方言から近代語に移る傾向を間接に窺はしめるに止まり、決して當時の方言を忠實に反映するものではない。方言的基礎に立つ文學語が舞臺に應用される迄には日常方言は自然の變遷を續行して近代方言の狀態に近づきつゝあつたのは勿論である。また諸種のプラークリット語の配當も實社會の狀況に卽したものとは云はれない。現

今印度の富豪の家庭には奴婢の身分・出生地に從つて數種の方言が混用せられてゐるのは周知の事實であるが、之をそのまゝ舞臺に移せば一般觀客は理解に苦しむに違ひない。サンスクリット劇に於けるプラークリット語の使用も特別の限定と規約との下に實生活の言語狀態を微に反映するものと考へる。

劇用プラークリット語の古形が馬鳴の佛教劇に殘ることは既に述べた。尙バーサ (Bhāsa. ca. 300 A. D.?) の戲曲、バラタの戲曲論は古形を示し、カーリダーサの作品に至り始めて劇用プラークリットの古典形に到着する。本來シャウラセーニーが最も重要な劇用プラークリット語でサンスクリットに最も近い。マーガディー語の特徵に就いてはすでに一言したが語尾の -e を單數主格の場合にのみ限つたのは明かに人爲的加工の痕を見せてゐる。次にマーハーラーシュトリー語は印度文典家により典型的プラークリットと目され、早くより抒情詩に用ひられ、敍事詩にも獨立の作品を出したが、劇中に使用せられたのは比較的に遲い。また音韻的に見ればプラークリット語の傾向を極端に進めたものと稱し得る。卽ち古典プラークリット語はサンスクリット語を模範としつゝも文法を著しく簡略にし、音韻方面に於いては好んで子音群を同化し、母韻の長短を音節の長短に應じて決定し、二母韻間の單子音は概して脫落せしむる等の特徵をもつてゐる。最後に擧げた特徵の結果、子音少く母韻の連續多き奇觀を呈し (例、loa- : Sansk. loka- ‘world’, uaa : Sansk. udaka ‘water’)、而もこの點に於いてマーハーラーシュトリー語は他のプラークリットを凌駕してゐる。從つて Sansk. kati ‘some’, kavi- ‘poet’, kapi- ‘monkey’ は共に Māhār. kaï- となり、Sansk. mata- ‘thought’, mada- ‘intoxication’, -maya- ‘consisting of’, mṛta- ‘dead’, mṛga- ‘deer’ は全て maa- となる。この狀態に於いては實用的に不便なのは勿論であるが、抒情詩語として見れば音韻的優美を感ぜしむる者がある。

この外嘗てグナーディャ（Guṇāḍhya）がその物語集（Bṛhatkathā）に用ひたと傳へるパイシャーチー語（Paiśācī）はｂｄｇを無聲化してｐｔｋとするを特徴とするが、この書は早く散佚して現存の資料によつては方言的基礎を決定するに苦しむ。（第二節、ダルディック支派の項參照。）

以上に擧げたプラークリット語の外、中古インド・アリヤン語の一種としてアパブランシャ語（Apabhraṁśa 元來“corrupt”の意）がある。サンスクリット語、プラークリット語と對立して用ひる名稱で、その名の示す如く元來通俗的起源を有することは明かであるが、現存の資料に關する限り、之も亦文學語の一種である。六世紀に出でたある國王は「サンスクリット語・プラークリット語及びアパブランシャ語で詩を作り得た」と稱讃せられてゐる通り決して日常方言（Deśabhāṣā）を代表するものではない。卽ち古典プラークリット語が固定して益〻日常方言より遠去かるに及び、大體その語彙を借用しつゝ之に方言的文法を適用したものがアパブランシャ語で、西紀一千年頃にはラージャスターナ及びグヂャラットのヂャイナ教徒によつて使用せられ、この地方はアパブランシャ語の發達に重要なる關係を示してゐる。その初期に基礎となつたプラークリット語は主としてマーハーラーシュトリー語及びシャウラセーニー語であつたらしく、西部印度に起つたアパブランシャ語は次いで北部印度全般に擴り、之に多數の地方的區別を生じた。かくの如くアパブランシャ語もプラークリット語と同じく一群の文學語の總稱となり、而も言語的には一歩近代方言に近づいたとは云へ、之から直接近代諸語を誘導し來る事は適當でない。グヂャラーティー語が西部アパブランシャ語に類似すると云はれるのは、蓋しアパブランシャ語が元來この地方の方言的要素を含んでゐる結果で、之が文學語として一般に使用されるに至る間、グヂャラーティー語の直接基礎をなした口語方言は獨立の變遷を續行して

ゐたに違ひない。

古代プラークリット語（殊にパーリ語）はサンスクリット語で說明できぬ音韻變化・語形を包藏し、古典プラークリット語も後者によつて解釋できぬ單語（deśī 'local word'）を含み、アパブランシャ語は方言的色彩を織り込んでゐるとは云へ、全體として概論すれば多種多樣の中古インド・アリヤン語は唯一個のサンスクリット語で說明し得べく、更に多數の近代諸語の大部分は恰も一個の中古語を基礎として發達したかの觀を呈する。而して古代語と中古語との距離は比較的に少く、全てサンスクリット的と稱し得るに對し、少數の例外を除き十三世紀以後既に文學にも使用されてゐる近代諸語は全く別種の言語に接するが如き感を與へる。吾人の知り得る印度語の歷史は文學語乃至共通語の歷史である。而も新文學語の興起によつて古文學語は廢されず、その傍に歷然として存在する。新古數種の文學語・文章語を通じて口語方言の存續を知り、絕えざる變遷の跡を窺ひ得るも、一旦文學語となるや地方的束縛を離れ、特殊の洗煉を受けて方言的色彩を薄くし、やがて全印度の文學的共有財產となり、口語との關係を斷つに至る。從つてインド・アリヤン語の歷史は古代・中古・近代の別を知るのみで、個々の系統を明示することができぬ。之を言語的に見れば全て單純化の歷史であり、綜合的より分解的への變遷である。古代ギリシャ語より遙に複雜な文法組織が現代英語のそれより更に簡單になつたと思へば大過ない。

第二章　ドラヴィダ語

前章に述べたインド・アリヤン語に對立し、印度の南半に擴る大語族をドラヴィダ語とする。現狀に就いて見れば、

インド・アリヤン語族に屬するマラーティー語・オリヤー語の境界線より以南コモリン岬に至る連續地帶（タミル語・マラヤーラム語・カナラ語・テルグ語等）を占め、セイロン島の北半を含み、且つ中部印度に散在する多くの「言語島嶼」を有する。又遠く離れてはバルチスタンのブラーフーイー語も之に屬してゐる。使用者總數は「印度言語調査」に從へば五千三百萬に達し、一九二一年の國勢調査に從へば、六千四百萬（印度人口の約五分の一）を超えてゐる。但しドラヴィダ語領域の大部分は「印度言語調査」の範圍に屬してゐなかつた。

一、タミル語 (Tamil)

マドラスとマイソールとを結ぶ線より以南の地を占め、セイロン島の北半を含み、西方は同族のカナラ語・アラヤーラム語と境してゐる。使用者總數千八百萬（「印度言語調査」千五百萬）を超え、ドラヴィダ語中最も重要なものである。現今總稱として用ひるドラヴィダなる名稱も、このタミルなる名稱も共にサンスクリット語 Draviḍa の轉化で、パーリ語の史傳マハーヴァンサ (Mahāvaṁsa 五世紀) には Dāmiḷa となつてゐる。尙タミル語は右の領域以外にも延び、ビルマを始め印度支那地方、南アフリカ等にも使用者をもつてゐる。小方言群を除き一般に行はれる標準タミル語は文學語 (shen 'perfect') と日常語 (koḍun 'rude') との間に著しき差異を示し、前者は古風の特徴を示して無敎育なるタミル人には了解し難いほどである。文學は早くより興り、近代インド・アリヤン文學の何れよりも遙に古い歷史をもつてゐる。遲くも西曆四世紀には相當に發達してゐたらしく、八世紀より十三世紀に亙つてヂャイナ敎徒の文學的活躍を見た。範をサンスクリット文學に取りつゝも獨自の詩美を發揮し、量に於いてもドラヴィダ文學中

第一位を占めてゐる。古代文學中特に有名なのはティルヴァルヴァル（Tiruvaḷḷuvar）に歸せられるクラル（Kuṛaḷ）で、印度に於ける人生の三目的法・財・愛（dharma, artha, kāma）に關する短詩一三三〇頌から成つてゐる。又十八世紀以後は近代タミル文學が隆興した。古くはヴァテールットゥ（Vaṭṭe ḻuttu）と稱する文字を用ひたが、現在のタミル文字も之に類似し、源は古き北方系印度文字に發すと云はれるが、大いに南方系のグランタ文字に影響されてゐる。

二、マラヤーラム語（Malayālam）

マラヤーラムとは元來「山岳地方」の意で、タミル語の西方、マラバール海岸に沿ひて行はれ、ラッカディヴ島を含み、使用者總數約七百萬（「印度言語調査」約五百四十萬）を算する。九世紀頃タミル語から分派したもので、その一方言と稱してもよいが、相當に發達した文學を有して獨立語の體面を保つてゐる。十七世紀より婆羅門文化の感化を受けて多數のサンスクリット單語を借用し、文學的にもサンスクリット文學及びタミル文學の影響を蒙つた。文字は前記のヴァテールットゥ文字を廢して南方系印度文字の一形卽ちグランタ文字（Grantha）を採用した。この文字はマラバール地方に於いてサンスクリット語を書くに用ひるものである。

三、カナラ語（Kanarese）

前記二種のドラヴィダ語の北方、マイソール州・ボンベイ省の東南端・ハイデラバード州の西南端を含み、東は同

族のテルグ語、北はインド・アリヤン系のマラーティー語と境し、使用者總數約一千萬に達する。ニルギリ高原に用ひられ古代カナラ語に近いと云ふバダガ語（Baḍaga 約三萬人）等二、三の小方言の外、南部カナラ地方に介在するトゥル語（Tuḷu 五十萬乃至六十萬人）、クルグ地方のコダグ語（Koḍagu 約四萬人）、ニルギリ高原のトダ語（Toḍa 約七百人）、コータ語（Kōta 約千二百人）もカナラ語に近い。

カナラ語最古の文獻は西暦五世紀に屬する短碑文で、文學の發達はタミル文學と同じくヂャイナ敎徒の努力に負ふ所多く、サンスクリット文學の影響が著しい。十六世紀以降は語彙にもサンスクリット要素が多量に混入した。文字は次に說くテルグ文字と同起源であるが、十三世紀以後固有の特徵を發達させて現代のカナラ文字となつた。

四、テルグ語（Telugu）

テルグの名はサンスクリット文獻には Triliṅga, Tilaṅga, Telaṅga 等の形で現はれ、回敎徒は Tilang, Tilangana 等の名で呼んでゐる。テルグ語の領域はサンスクリット文學に所謂アンドラ地方（Andhra）に相當しマドラス省の東部とハイデラバード州の東部とに擴り、南はタミル語、西はカナラ語及びマラーティー語、北はオリヤー語に接してゐる。ドラヴィダ語中最多數の使用者を擁して約二千四百萬（「印度言語調査」約二千萬）を算し、印度本國以外にも擴つてゐる。少數の部族的差別を除いては著しき方言の發達なく、文學は十一世紀より盛で、サンスクリット文學の影響と共に、隣接のカナラ文學よりも感化を受けたらしい。文獻は大敍事詩マハーバーラタの翻譯に始り、十六世紀以後は文藝の隆昌を見た。文字は南方印度系に屬し、古代カナラ文字（Hala-kannaḍa）と殆んど同一である。

五、その他のドラヴィダ語

上記四種の文學語の外中央諸州及びベラール・オリッサ・チョータナグプールの各地に亙り、インド・アリヤン語の領域内に散在し、一部分は次章に說くムンダー語と境を接して數個のドラヴィダ語が存在する。一般に未開の人民の使用するもので文字・文學なく、數に於いて最も重要なるをゴーンディー語とする。

ゴーンディー語 (Gōṇḍi) は數個の言語島嶼より成り、主として中央諸州に行はれ百三十萬乃至百六十萬人の使用者を有する。多數の方言ありと云はれるが主要形に於いてはテルグ語より寧ろタミル語・カナラ語に近いとされてゐる。但しその領域は四圍のインド・アリヤン語及びテルグ語によつて次第に侵蝕せられつゝある。

テルグ語の西北部とゴーンディー語とに挾れてコーラーミー語 (Kōlāmi) があり、言語上何れの支分ともなし得ない。之に頗る近くその一方言と目し得るものにビーリー語 (Bhili) があり、ベラールのバシム地方に行はれる。兩者併せて約二萬四千人の使用者を有するに過ぎない。

次にオリッサ地方にはクイー語 (Kui, Khand, or Khandhi) があつて約四十八萬人(「印度言語調査」約三十二萬人)に使用され、テルグ語に類似する點ありと云はれる。

その北方チョータナグプールのクルク語 (Kurukh or Orāon) は約八十六萬人(「印度言語調査」約五十萬人)の使用者を有し、遠く東北方に離れたラヂュマハル高原のマルト語 (Malto 六萬五千人、「印度言語調査」一萬二千人)と頗る近い。兩語の使用者は彼等が嘗つて南方カルナティック地方より北方に移住し、囘教徒の壓迫を受けて兩部に分れたと云

ふ記憶を保存してゐる。この傳說の眞正なることは兩語がカナラ語及びタミル語に近き點によつて證明せられる。但し兩語はムンダー語と境を接する爲、その影響を蒙り、殊にマルト語はムンダー語族のサンターリー語から單語を借用してゐる。

六、ブラーフーイー語 (Brāhūī)

以上多少なり連續した地域に擴るドラヴィダ諸語に對し、遠く西北方バルチスタンの地にバローチー語（第一章第一節參照）を兩斷して介在するものにブラーフーイー語がある。その本質に於いてドラヴィダ語たるは疑なき所であるが隣接するペルシャ語・バローチー語・シンディー語よりの借用語多く、文學は發達しない。使用者總數は十六萬乃至十八萬と査定されてゐるが、他民族との結婚に制限なき故人種的純粹性は望まれず、南印のドラヴィダ語使用者とは著しく風貌を異にする。

前章に說いたインド・アリヤン語、次章に說くムンダー語は夫〻印度以外に亙る大語族の一部をなすに反し、本章に列擧したドラヴィダ諸語は全體として一語族を形成し、印度以外に同系語をもつてゐない。ブラーフーイー語の使用者を除き、他のドラヴィダ語使用人はムンダー語の使用者と人種的特徵を共通にする故、この兩語群の間に親緣關係を求めんとする企圖もあるが、その證明は成功してゐない。近代インド・アリヤン語が如何ほど簡略化されても吾人は歷史的觀察の基礎として古代語を知り、不完全ながら變遷の階程を窺ひ得るに反し、ドラヴィダ語の文法は現在

に傳はる最古の文獻より今日に至るまで著しき變化なく、比較によつてのみ古形に溯らんとする比較文法に非常な不便を與へてゐる。勿論こゝに細說することはできぬから、普通ドラヴィダ語文法の特徵と云はれる點を二、三擧げるにとどめておく。名詞・動詞の變化は後接辭（suffix）の附加によつて行はれ、形態的分類上日本語等と等しく膠着語（agglutinative language）の一種とされ、サンスクリット語の如き屈折語（inflexional language）と區別せられる。ブラーフーイー語を除き、名詞は「上級語」と「下級語」とに分たれ、前者は神・惡魔・人間を含み、後者は畜類・無生物を含む。名詞自身は文法上の性別（gender）によつて形態を異にしないが、之に一致する代名詞及び動詞に區別を生じ、又女神及び女人を上層語として扱ふか否かに關して各語の間に一致を見ない。動詞の變化に代名詞的要素を多分に含み、且つ名詞要素（nominal elements）が文法の重要部分をなしてゐる點は現代ドラヴィダ語の一特色である。然し古くはある程度まで動詞の人稱形が存在したことを窺知せしむる語形も保存されてゐる。全般的ではないが動詞に所謂否定相（negative voice）の存すること、關係代名詞なくして分詞の特別形（'relative participial noun）を使用すること等も特徵として擧げられる。

ドラヴィダ語の文獻は西曆五〇〇年以前に溯り得ず、間接にはタミル文學の更に古きを知り、且つ他の資料によつて南印の文化は西曆以前に始り、西曆前三世紀或はそれより前に興起した南印の王朝名が傳へられてゐるが、言語狀態を直接示す資料はない。ドラヴィダ語もインド・アリヤン語と同樣に印度侵入者の言語であり、初めは印度の西北部一帶に擴つてゐたが、後インド・アリヤン人の侵入に遭つて驅逐されてヴィンディヤ山脈以南に移り、現今のブラ

ーフーイー語はその殘存に過ぎぬとも考へられる。然しブラーフーイー語の特質は寧ろカナラ語及びクルク語と相通じ、クルク語はマルト語と共に有史時代に南方より中部印度へ移つたと云ふこと等を考量すれば、逆にブラーフーイー語を南印或は中印よりの移入語とも見なし得る。ドラヴィダ語が印度土着のものか否かを決定することはできないが、インド・アリヤン人の侵入に際し之と接觸した先住民の言語は果してドラヴィダ語であつたか。この問題に答へる前、印度に於ける他の語族卽ちムンダー語を瞥見する必要がある。

第三章　ムンダー語

カシュミールの西北隅ハンザナガル地に存するブルシャスキー語 (Burushaskī) の他語族に對する親緣關係は不明であり、チベット・ビルマ語族に屬する諸語は印度本土の北邊を掩ひカシュミールの東北部よりヒマラヤ山系地方を貫いてアッサムの東北部に達し、それより南方印度支那地方に分布するが、印度本土に於ける言語系統の中核には屬しない。故に本書が記述すべきものとしてはムンダー語のみが殘されてゐる。

インド・アリヤン語が雄大なるインド・ヨーロッパ語族の一員をなす如く、ムンダー語はシュミット師 (Pater W. Schmidt) の提唱に從つて一般にオーストリック (Austric) と呼ばれる大語群中、オーストロ・アジヤ語族 (Austro-Asiatic family) に屬すと云はれてゐる。印度支那には同語族の一支派モーン・クメール諸語 (Mōn-Khmēr languages)、アッサムにはカーシー語 (Khāsī 約二十萬人、一九二一年調)、ニコバル諸島にはニコバル語 (Nicobarese 約八千六百人) がある。然し玆には印度本土を主眼とする故ムンダー語に就いてのみ記述する。

ムンダー語は現今中部印度のチョータナグプール高原を中心とし、ガンヂス河平原よりマハーナディー河三角洲に擴り、西方マハーデーオー丘陵地方に言語島嶼をもつてゐる。東部のケールワーリ語群（Khērwāri）はサンターリ語（Santāli）・ムンダーリー語（Muṇḍāri）・ホー語（Hō）・ブミヂュ語（Bumij）・コルワー語（Khorwā）等を含み使用者總數三百五十萬（一九二一年調）を超え、西部群としてはクールクー語（Kūrkū）・カリヤー語（Khaṛiā）・ヂュアーング語（Juāṅg）・サヴァラ語（Savara）・ガダバー語（Gadabā）等があり使用者總數は五十萬を出でない。ムンダー語使用者の文化程度は概して非常に低く、固有の文字・文學は存在しない。地理的分布を一覽して明かなる如く、インド・アリヤン語の東部支派、ドラヴィダ語族のクルク語・クイー語・ゴーンディー語の領域中に介在し、東方及び北方はチベット・ビルマ語族を控へて到る處に言語的侵蝕と壓迫とを受けてゐる。

ムンダー語なる名は始めて之とドラヴィダ語との區別を明言した故マックス・ミューラー教授の命名に基づき（一八五四年）、ムンダ人（Muṇḍa）は東方の部族として大敍事詩マハーバーラタ及びプラーナ書類に見えてゐる。サンスクリット文獻には總括的名稱としてコーラ（Kola）を用ひた例もあるので、ムンダー語派を總稱してコール語（Kōl 元來「人」の義）と呼び、ムンダーなる名は部分的稱呼としてランチ地方のムンダーリー語のために保留せんとする學者もある。尚オーストロ・アジヤ語一般及びムンダー語とモーン・クメール語との關係に關しては松本信廣教授が本講座中「印度支那言語の系統」に於いて研究文獻を擧げて詳しく解說せられてゐるから就いて見られたい。同書中にはシュミット師とヘヴェシー氏（W. F. Hevesy）との論爭に關しても述べられてあるから茲には本年に入りシュミット師が更に自己の見地を辯護して「ムンダー語の位置」（Die Stellung der Munda-Sprachen. Bulletin of the School

of Oriental Studies, vol. VII. London, 1935, pp. 729-738) なる論文を發表したことを附加すればよい。

ムンダー語は本質上膠着語の一種とされるが、モーン・クメール語と異り、後接辭をも盛に使用し、意義・機能の概して明瞭な添接辭 (affix) を語根要素の頭・尾・中間に附加挿入して複雜なる動詞を造り、名詞の性に關してはムーン・クメール語と同じく生物と無生物とを區別し、この點前述のドラヴィダ語と異る。動詞形に於いては一般の膠着語より遙に複雜な發達を示し、代名詞形の發達と共にムンダー語の特徴とされてゐる。最後に擧げた特色はベンガル省の北端ダージリング近邊よりヒマラヤ山系の南麓に沿ひてパンヂャーブの東北部に至る間の諸所に散在する小言語群にも認められ、之等は時に「複雜代名詞語」(complex pronominalized languages) の名を得てゐる。その所屬に關し「印度言語調査」は之をチベット・ビルマ語族の中に入れ、プヂュルスキー教授 (J. Przyluski) は之をムンダー語と認め、インド・アリヤン語及びチベット・ビルマ語の影響甚大にして時に所屬の疑はしい場合もあるが、形態に關して云へば寧ろムンダー語中に入るべきだと說いてゐる。前述の如くムンダー語の動詞は多くの添接辭を使用して時・法・相・使役・相互關係等を表はし、且つ代名詞の種々なる形を添加挿入する爲、往々にして一連の長語形を生ずることがある。次にグリヤソン博士の擧げたサンターリー語の一例を借用する。dal-ocho-akan-tahen-tae-tiñ-a-e 'he, who belongs to him who belongs to me, will continue letting himself be struck'. この中「打つ」なる意を示す語根要素は先頭の dal- でその中間に更に pa を挿んで dapal- とすれば相互關係の意味が加へられる。この奇怪なる動詞形を見ればムンダー語がインド・アリヤン語のみならず、ドラヴィダ語とも著しく異るのを容易に了解し得ると思ふ。

現在に於けるムンダー語の分布が長い間有力なる語族に壓迫せられた結果とすれば、往古雪山よりベンガル灣に至る東北部印度がムンダー語の領域であつたと想像しても無理ではない。果して然らばムンダー語も亦インド・アリヤン人侵略以前より印度に存在した言語の一つと考へ得る。筆者に許された紙數は旣に盡きてゐるが次に上記三語族の古代に於ける交渉に就き一言したいと思ふ。

結語

北邊を圍むチベット・ビルマ語族は印度の外周を掠むるに過ぎず、西北隅のブルシャスキー語の所屬は全く不明であり、インダス河文明を擔つた言語の祕鍵は未だ與へられない。之に反し有史時代の文化語たるインド・アリヤン語とドラヴィダ語とは現在に至るまで多彩にして旺盛なる活力を持續してゐる。前者はギリシャ語・ラテン語等と起源を同じくしてインド・ヨーロッパ語族に屬し、後者は獨立の語族を形成することは旣に述べた。又印度支那及び南海諸島に親緣語を有するムンダー語は現在餘燼を中部印度の一角に保ち、有史時代の文化に於いては到底前二語に比すべくもないが、嘗つては廣くガンヂス河平原をその領域とし、その根柢の古き事前二者に優るとも決して劣るものでない。

インド・アリヤン語最古の文獻リグ・ヴェーダ本集によれば、パンヂャーブへ侵入したアリヤン人は黑色の先住民をダーサ或はダスユ (Dāsa, Dasyu) と稱し之を惡魔と同等視し、その絕滅をアリヤン諸神の恩惠に歸し、英雄神イ

ンドラに粉碎せられたダスユは「無鼻」(anās-) と形容されてゐる。恐らく先住民は皮膚の色のみならず相貌をも異にし、鼻の扁平なるを特徴としたのであらう。尙同じ頌句は之等のダスニを mṛdhravāc- と呼んでゐる。この語を「不明瞭・不正なる言語を話す、βάρβαρος」の義に解する學者はインド・アリヤン語と異る先住民の言語を指すものとするが、リグ・ヴェーダ本集の他の個所はかゝる意味を要求せざるのみか、「誹謗する、罵詈する」の義を適當とすることすらある。故にリグ・ヴェーダ本集は先住民の言語に關して明瞭な記載を含まない。寧ろ先住民が宗教を異にしてアリヤン神を崇拜せず、祭式を行はず、誹謗の言辭を弄した點が特に侵入者の憤怒と侮蔑とを買つたらしい。然し自己より優秀なる文化を有する新來のアリヤン人に對し、山寨に據つて頑強に抵抗した先住民は如何なる民族であつたか、又如何なる言語を用ひてゐたかを斷定すべき直接の證據は何もない。

現在の狀態より推してこの黑色低鼻の先住民がドラヴィダ語或はムンダー語を用ひてゐたと想像するのは自然であるが、當時西北印度の言語は必しもこの二種のみでなく、早く滅亡して今日に傳はらざる他の言語の存在を假定する餘地は充分に殘されてゐる。然し目下の問題はかゝる未知の言語の探索にあらずして、既知の二言語が古代インド・アリヤン語に影響の跡を殘したか否かを知るにある。

ある國語の領域に他の國語が移植せられる場合、例へ在來の國語は亡びてもその痕跡を征服語の中に殘し、殊にその發音に影響を與へるを常とする (substratum-theory)。勿論印度に於いてドラヴィダ語もムンダー語も亡びたのではないが、先住民の一部は早くアリヤン化し、征服者と被征服者との間に混血が起り、言語の轉換が行はれた以上、古代インド・アリヤン語の發音中に先住民の發音特徴の含まれてゐることは想像に難くない。他のインド・ヨーロッ

パ語のみならず、古代イラン語にも見出されぬ特徴として、インド・アリヤン語はその最古の時代から所謂セレブラル音（cerebral）を有して普通の歯音（dental）と區別してゐる。セレブラル音は舌端を内方へそらして齒槽部に觸れて發音される。勿論あらゆる齒音がセレブラル化したのではなく、インド・アリヤン語の發音傾向に從ひ特殊の條件の下に於いてのみ先住民の發音習慣が潜入したと見るべきである。然し此種の音はドラヴィダ語にもムンダー語にも存在する故、果して何れの影響と見るべきかは輕率に斷定するを許さない。次にリグ・ヴェーダ語は母韻の中間のセレブラル ḍ, ḍh を夫〻 ḷ, ḷh（セレブラル的l音）に變ずるのをその特徴とするが、後のヴェーダ語及びサンスクリット語は再び ḍ, ḍh を示してゐる。パーリ語（中古インド・アリヤン語の一種）もリグ・ヴェーダ語と同樣に ḷ, ḷh を有し、シンハリーズ語（セイロン島の近代インド・アリヤン語）も ḷ（＜ ṭ, ṭh, ḍ, ḍh）をもつてゐる。起源を別としてl音のみの存在に關して云へば西部印度に屬するパンヂャーブ語・ラーヂャスターニー語・グヂャラーティー語、ドラヴィダ語と隣接するマラーティー語・オリヤー語等の近代インド・アリヤン諸語にも發見せられる。而して重要なことにはこの音はドラヴィダ語には存在するが、ムンダー語には發見せられぬ。以上によりセレブラル音の起因としてはドラヴィダ語の影響を有力視せざるを得ず、又實際ドラヴィダ起源と目すべき單語がセレブラル音をそのまゝ保有してゐる例もある。Atharvaveda tāḍa- 'a stroke', Pāli tāḷeti 'he strikes': Tamil, Kanarese, Telugu taṭṭu 'to tap, strike' の如きはその一例である。然し借用語の關係に就いて見ればドラヴィダ語の影響は「中央地方」に於いて強く認められ、この點ではムンダー語と異る所なきを注意せねばならぬ。

この方面の一權威パリのヂュール・ブロック教授の研究によれば、何れの時代にもドラヴィダ語が多數のインド・

アリヤン系單語を借用してゐるに對し、古代インド・アリヤン語中明かにドラヴィダ起源と認められるものは比較的少い。若干の動植物名、通俗的起源に歸し得る若干の動詞・形容詞の外、頭髮・結髮に關する名詞、少數の病名、團扇等に過ぎず、當初よりアリヤン文化の優越してゐたことを示すものである。然しサンスクリット語に於いて技藝の總稱となつた kalā- (古典時代には六十四種を數へる) の語源が Tamil, Kanarese kal-, Telugu, Gōndi kar- 'to learn' に歸せられるのは注目に値する。ドラヴィダ起源の借用語中リグ・ヴェーダ時代に溯り得る例としては祭式用の「臼」ulūkhala- (cf. Tamil ulakkei 'pestle'! 'to grind, to thrash' を意味する語根から造られたものらしい) のみで、之と一對をなす「杵」の名は矢張りドラヴィダ起源とされるがアタルヴァ・ヴェーダ本集に始めて現はれてゐる。即ち musala- 'pestle': Kanarese mase, masagu 'to rub, to grind' 兩語が後接辭 -ala を共通にしてその通俗性を發揮してゐる點も特に注意すべきである。最後に水を意味する nīra- も明かにドラヴィダ起源 (cf. Tamil, Kanarese nīru, Telugu nīḷḷu) と思はれるが河名 Sadānīrā (「常に水を湛ふる河」の義) は既にシャタパタ・ブラーフマナに見えてゐる。婆羅門文化の東進を暗示する興味ある說話中にこの河名を擧げ、夏尙冷水を湛へると謂ひ、且つ之をヴィデーハ (Videha) とコーサラ (Kosala) との境界とし、往時その東方は未開で婆羅門の住居に適しなかつたが、今は普く文化に浴して多數の婆羅門ありと述べてゐる。これが果して現今の如何なる河に當るか明瞭でないが、地理的關係を考量して恐らくガンダック川 (Gandak 古名 Gaṇḍakī) であらうとされてゐる。一時婆羅門文化の東境を劃したと云ふ河の名にドラヴィダ起源の單語を殘し、且つ後に說く如くコーサラなる地名がムンダー起源を想はしめることをへれば、太古に於ける北部印度の複雑なる言語狀態の一斑を想像するに難くない。

ムンダー語の影響に關する研究も近時大に進歩し、殊にプヂュルスキー教授はサンスクリット語中に存するムンダー語起源の單語を指摘して重要なる貢獻をなした。植物に關してはバナナ (Sanskrit kadalī-)・ベテル (tāmbūla-)・綿 (karpāsa- cf. Greek χάρπασος) を含み、器具に關しては犂 (lāṅgula-)・箭 (bāṇa-) が擧げられてゐる。この最後の語は唯一回ながら既にリグ・ヴェーダ本集に見えて居り、從來の矢 (isu-) と異り、竹をもつて製することをムンダー人より學んだものと考へられる。同教授は更に進んで印度の古傳說中にムンダー系の影響を尋ね、又ムンダー語中最もよく知られてゐるサンターリー語の計算法並に數詞 (gaṇḍa=4, kuri=4×5=20, pón or pan=4×20=80) がそのまゝベンガル語にも認められ、サンスクリット語へ入つては gaṇḍaka-, paṇa- なる單語として殘つてゐることを教へた。(特に J. Przyluski : La numération vigésimale dans l'Inde. Rocznik Orjentalistyczny IV. 1926, pp. 230-237 參照。) 他方に於いてシルヴァン・レヴィ教授は該博なる蘊蓄を傾けた論文 (Pré-Aryan et Pré Dravidian dans l'Inde. Journal Asiatique CCIII. 1923, pp. 1-57) に於て Kosala : Tosala, Aṅga : Vaṅga, Kaliṅga : Triliṅga, Utkala : Mekala, Pulinda : Kulinda 等の如くサンスクリット語文獻に一對をなして擧げられ而も語頭の子音を異にする古代印度の地名に就き論證し、これをムンダー語に普通なる前接辭の交迭に歸した。之等の地名はカシュミール の東境より印度半島の中央に亙り、コーサラは前述した通り既にシャタパタ・ブラーフマナに現はれ、プリンダはアイタレーヤ・ブラーフマナに見えてゐる。この書はプリンダ人と共に未開なる民族としてシャバラ (Śabara) を擧げてゐるが、これプトレミーの Σαβάροι, プリニーの Suari と同一なるべく、この名は現代にも傳り、ムンダー語

の一種にサヴァラ語のあることは既に述べた所である。アンガは更に古くアタルヴァ・ヴェーダに見えてゐるが、Anga : Vanga の如き交迭を、ムンダー語の性質によく合致して分解し得る Ko-sala : To-sala, Pu-linda : Ku-linda と同様に論じ得るや否やは頗る疑問とされてゐる。尙固有名詞の研究に關しては J. Przyluski : Un ancien peuple du Penjab : Les Udumbaras. Journal Asiatique CCVIII. 1926, pp. 1–59; Hippokoura et Śātakarṇi. Journal of the Royal Asiatic Society 1929, pp. 273–279 參照。尙この方面の重要な論文は概ね印度のバグチ博士により、英譯せられ、自身の研究と共に一書に收めて刊行されてゐる（參考書の項參照）。

以上によりドラヴィダ語もムンダー語も共に古代インド・アリヤン語に影響したことを知り、特にその接觸の跡はリグ・ヴェーダ以後のヴェーダ語及びサンスクリット語に窺はれる。しかしリグ・ヴェーダ語の音組織に特色を與へてゐるセレブラル音（lを含む）の起源に關しては寧ろドラヴィダ語の影響を想はせる。假りにムンダー語を以つて最古とし、次いでドラヴィダ語の侵入、最後にインド・アリヤン語の侵入を想像すれば、アリヤン人の侵略以前ドラヴィダ語はムンダー語を壓迫してインダス河流域より南方デカンの地へ延び、ムンダー語は主としてヒマラヤ山麓よりガンヂス河流域に擴り、次いで兩語は新來のインド・アリヤン語の爲に南方及び東方へ驅逐され、ドラヴィダ語は遂にデカン地方を本據として發達し、特色あるドラヴィダ文明に伴つて文化語となつたに反し、ムンダー語は次第に凋落の路を辿り、チョータナグプールの地に雌伏するに至つたと考へる。かくの如きは全く想像で實際には當時の言語狀態を示す何等の資料なく、且つインダス河文字が充分に解讀せられその言語系統が闡明する時、印度の言語史は幾多の點に於いて改訂せらるべきは勿論で、吾人はその時の一日も速ならんことを切に祈つて擱筆する。

參考書

なるべく概括的にして而も學術研究の基礎となるものに限り、原則として各語・各方言に關する實用文典・辭書或は餘りに專門的なる特殊研究の列擧を避けた。

一、一般

A. Meillet et M. Cohen : Les langues du monde. Paris, 1924 (Langues indo-européennes par J. Vendryes=pp. 19–79, Langues dravidiennes par Jules Bloch=pp. 345–359 ; Langues austroasiatiques par J. Przyluski=pp. 385–403).

W. Schmidt: Die Sprachfamilien und Sprachenkreise der Erde. Heidelberg, 1926 (pp. 39 ff., 119 ff., 135 ff.).

E. Kieckers: Die Sprachstämme der Erde. Heidelberg, 1931 (pp. 4 ff., 96 ff., 112 ff.).

G. A. Grierson: Linguistic Survey of India. 11 vols. Calcutta, 1903–1928.

グリヤソン博士の筆になる數種の全印度言語概説中特に本書の第一卷・第一部 (Introductory, 1927) を推稱する。

二、インド・アリヤン語

イ、概説

J. Wackernagel : Altindische Grammatik. I. Göttingen, 1896 (pp. IX-LXXIV Einleitung).

J. Mansion : Esquisse d'une histoire de la langue sanscrite. Paris, 1931.

J. Bloch : Some problems of Indo-Aryan philology. Forlong lectures for 1929. Bulletin of the School of Oriental Studies, vol. V. part IV. London, 1930, pp. 719-756.

———— : L'Indo-aryan du Veda aus temps modernes. Paris, 1934.

研究史

W. Wüst : Indisch. Berlin und Leipzig, 1929.

他語族との關係

Pre-Aryan and Pre-Dravidian in India by Sylvain Lévi, Jean Przyluski and Jules Bloch, translated from French by Prabodh Chandra Bagchi. Calcutta, 1929. 〔主要なる内容を示せば Non-Aryan loans in Indo-Aryan (J. Przyluski) ; Further notes on non-Aryan loans in Indo-Aryan (〃 〃) ; Sanskrit and Dravidian (J. Bloch) ; Pre-Aryan and Pre-Dravidian in India (S. Lévi)〕

ロ、古代語

J. Wackernagel : Altindische Grammatik. I. II 1. III. Göttingen, 1896–1930.
A. A. Macdonell : Vedic Grammar. Strassburg, 1910.
L. Renou : Grammaire sanscrite. Paris, 1930.
A. Thumb : Handbuch des Sanskrit. 2. Aufl. (H. Hirt), Heidelberg, 1930.

B. Delbrück : Altindische Syntax. Halle, 1888.
J. S. Speyer : Vedische und Sanskrit-Syntax. Strassburg, 1896.

ハ、中　古　語

阿育王碑文

E. Hultzsch : Inscriptions of Asoka. Oxford, 1925.
A. C. Woolner : Asoka text and glossary. Calcutta, 1924.

パーリ語

W. Geiger : Pāli Literatur und Sprache. Strassburg, 1916.

プラークリット語

R. Pischel : Grammatik der Prākrit-Sprachen. Strassburg, 1900.

A. C. Woolner : Introduction to Prakrit. 2 nd. ed. Calcutta, 1928.

アパブランシャ語

H. Jacobi : Bhavisatta Kaha von Dhaṇavāla. München, 1918.

———— : Sanatkumāracaritam. München, 1921.

M. Shahidullah : Les chants mystiques de Kāṇha et de Saraha. Paris, 1928.

二、近代語

G. A. Grierson : Linguistic Survey of India (前出).

———— : Indo-Aryan vernaculars. Bulletin of the School of Oriental Studies, vol. I. part II. 1918, pp. 47–81, part III. 1920, pp. 51–85.

———— : On the modern Indo-Aryan vernaculars. Indian Antiquary, 1931–1933 (Supplement).

少しく古いが近代インド・アリヤン語の比較研究に基礎を與へた書籍を擧げれば

John Beames : A comparative grammar of the modern Aryan languages of India. 3 vols. London, 1872–1879.

A. F. R. Hoernle : Grammar of Eastern Hindī compared with the other Gauḍian languages. London, 1880.

個々の研究中特に重要なるは

Jules Bloch : La formation de la langue marathe. Paris, 1920.

S. K. Chatterji : Origin and development of the Bengali language. 2 vols. Calcutta, 1926.

R. L. Turner : A comparative and etymological dictionary of the Nepali language. London, 1931.

三、ドラヴィダ語

Linguistic Survey of India. vol. IV : Muṇḍā and Dravidian languages (pp. 277 ff. by Sten Konow). Calcutta, 1906.

ドラヴィダ語比較研究の基礎となつたものは

R. Caldwell: A comparative grammar of the Dravidian or South-Indian family of languages. London, 1865, 2nd ed. 1875, 3rd ed. (repr. after the auther's death) 1913.

その他この語派の研究に對しフランスの J. Vinson, 印度の K. V. Subbaya の著書・論文は重要であり、ブラーフーイー語に關しては D. Bray: The Brahui language. Calcutta, 1909 參照。

四、ムンダー語

Linguistic Survey of India. vol. IV: Muṇḍā and Dravidian languages. Calcutta, 1906.

Pater W. Schmidt の著書・論文に關しては本講座中松本信廣教授「印度支那言語の系統」參照。尚オーストロ・アジヤ語族の研究に新時代を劃したものとして E. Kuhn: Beiträge zur Sprachkunde Hinterindiens. Sitsungsberichte der bayer. Akad. der Wiss. München, 1889, pp. 219 ff. の名を記念する。現代ムンダー語中最もよく研究されてゐるのはサンターリー語で The Rev. P. O. Bodding の功績が著しい。

昭和十年八月十日印刷
昭和十年八月十五日發行

岩波講座 東洋思潮 第十一回配本

編輯兼發行者 印刷者 東京市神田區一ツ橋 岩波茂雄

印刷所 東京市神田區錦町 精興社

大森製本

發行所 東京神田一ツ橋 岩波書店